

大谷伝説 空前絶後

産経新聞の夕刊、大谷の最終試合の翌日になるのだが、(日本と米国との時差による) 大きな見出しで「大谷伝説 空前絶後」とある。つまり、規定打席数とともに、規定投球回数をクリアーしたと書いてある。MLB でかつてなく、「今後もないだろう」という意味らしい。いかに大谷が空前の選手であり、今もっとも輝いている選手であっても、この 100 年間に存在しなかったといっても、褒めるのはいいが、・・・空前はあっても、絶後かどうかはわからないではないか。

以下余談。50 年以上前に、「空前絶後の意味を書け」という入試問題が出たことがあった。傑作をひとつ。「午前中は空腹で、午後になって気絶した」早稲田大学での話であるが、まあ、その程度の大学だ。(ただし、学部によりますが)・・・その後も著名人や有力者の紹介であれば、ほとんど無試験で合格する。どうも 100 年前から、その体質は変わらないようだ。

30 年ほど前に、親父の法事に東京から来てくださった方がいて、この方の母親が樋端久利雄航空参謀中佐の従妹で、息子の紹介状を書いてほしいと頼んだところ、快諾した。早稲田大学当局は大騒ぎになって、無論合格である。この方は優秀だったため、のちに清水建設の幹部になり、活躍されたそうである。

早稲田のノータリンも新聞記者もあまり変わらない。(すでに書いた)

それはともかく、大谷の打席数が規定回数を超え、最終戦で(無理をすれば最終戦でなくてもよかったのであるが) 投球回数が規定回数に到達した。で、このことを表現するのに、「空前絶後」を使ったから、嗤う。「空前」はいいが、「絶後」かどうか、わからないのではないか? 現時点では、大谷を超えた選手がいなかったらだろうけど、10 年、30 年、50 年、あるいは 100 年、さらに数百年後に大谷以上の素質を持った選手が現れないとも限らない。大谷の凄さは、打者としても優れている(今年の結果は、昨年を下回ってしまった感があるが、大谷は「打率を上げる」ことに重きを置いていた。そして、達成した。彼個人としては大いに満足な成績だったらしい。) 投手としては、他の投手専任の選手でもなかなか難しい規定投球回数を成し遂げたことである。1 試合 5~6 イニング投げて、年間を通じて 30 回以上、先発で安定した成績で登板しなければ達成できない。すべての日本人投手が言う、「登板翌日には、筋肉痛で、何もしたくない。」・・・これに対し、大谷は、翌日も打者として先発出場し、3 割以上の打率とホームラン数本を打っている。これが、彼等現在は評論家になっている元選手たちの共通した驚きである。

こういう誰も成し遂げなかった偉業の時の表現は、「前人未踏」あるいは「前人未到」というのです。編集長は、それほど若いひとではないだろうに、……だから、新聞記者は頭が悪いと言われるのです。またエンジェルスでなければ、20勝していたかもしれない。エンジェルスの右翼手の Ward が、なかばぼやきながら、「ショーヘイが投げるときは、暇をもてあます。」これほど味方の選手に信頼され、かつ期待に応える選手と言うのも珍しい存在ではある。

規定投球回数をクリアしたとき、両手や帽子を違反物質を使用していないかどうか確かめる審判が、ニッコリして握手したのも初めて見た。チームメートも2~3人がハイタッチしたくらいで、いかにも当然！とスルーした。

連敗・連敗の中で、つねに連敗ストッパーになったことを、味方の選手がよく知っている。

昨年 of 悪い時には、2~3インニングで四球や死球で自滅していたが、今年はやや横から投げて、死球の心配がなかった。

さらに脅威は、シーズンもなかばを過ぎてからの8月半ばからツーシーム（日本では長くシュートと呼んでいた。）を投げ出し、しかも、その上下左右の変化が40 cmと50 cm、しかも時速100マイル。……これはバッターも手が出ないだろう。こういう「離れ業」が可能というのも、大谷の非凡さが伺える。

エンジェルスでは、ホームランを打って帰ってきた選手にカウボーイハットをかぶせ、時に顔に水をかける。いかに厚顔無恥（厚顔無知？）の記者や編集長でも、いまさら「テンガロンハット」とは書けないだろう。

バッターとしても、昨年よりも納得している、という。来年は、さらに向上するだろう。……今年、ストライキのためオープン戦がなかった。シーズン当初、打席で重心が踵寄りになっていたが、来年はそのようなことはないだろうから、初めから終わるまで期待できるだろう。

2022. 10. 10.